

沖縄やちむんの里での作陶技術研修



鶴岡誠

目 次

1	研修にあたって	1
2	研修日程	2
3	研修報告		
	(1) 壺屋焼について	3
	(2) 読谷壺屋焼「常秀工房」島袋常秀氏との出会い	4
	(3) 成形から焼成までの製造工程	5
	(4) 釉薬研究会にて	9
	(5) 抱瓶と面獅子作り	10
	(6) 共同窯での窯焚きから窯出し	11
	(7) 壺屋まつりについて	13
	(8) 食器作り(ガス窯焼成)	14
	(9) 石垣島の作家を訪れて	16
	(10) 沖縄本島での視察研修	17
4	研修を終えて	20

1 研修にあたって

(1) 研修期間

平成 17 年 9 月 16 日 ~ 平成 17 年 12 月 15 日

(2) 研修先

沖縄県中頭郡読谷村座喜味

読谷壺屋焼 常秀工房 島袋常秀氏

(3) 研修目的

沖縄壺屋焼は素地の上から白化粧掛けをして、それから線彫りや掻き落しを始め呉須絵や鉄絵さらに上絵など多彩でさまざまな伝統装飾技法がある。同じ民陶の流れを受けている小石原焼も化粧土を施して伝統技法の装飾を行うのが主である。

沖縄独自の風土や文化によって発展を続けている壺屋焼、その地で研修する事で沖縄のやちむんへの理解を深めたいと思った。壺屋焼技術の修得やその他の工房などを視察する事で、今後の作陶活動に学んだものを付加していきたい。

2 研修日程

年月日	滞在先	研修内容	視察等
H17.9.16 (1週目)	沖縄読谷村 常秀工房	常秀工房・島袋常秀氏の元での作陶技術研修 (ロクロ成形～加飾～焼成)	沖縄三越にて 「現代沖縄陶芸展」見学
9.23 (2週目)		だち瓶作り	
9.30 (3週目)		釉薬研究会に参加	
10.7 (4週目)		面獅子(面シーサー)作り	壺屋博物館 八重山博物館
10.14 (5週目)		石垣島視察研修 ・アンパル陶房, 南島焼	南嶋民俗資料館 沖縄県立博物館
10.21 (6週目)			首里城, 王陵 読谷村立歴史資料館
10.28 (7週目)		登り窯焼成(金城次郎窯) ・上江洲茂生窯	座喜味城跡
11.4 (8週目)		壺屋まつりに参加(カーミスーブに出る)	瀧田頂一作陶展(那覇)
11.11 (9週目)		・壺屋「育陶園」	
11.18 (10週目)		小石原の土での実験	
11.25 (11週目)		・新垣陶苑	
12.1 (12週目)			
12.9 (13週目)		帰省	
12.15			

3 研修報告

(1) 壺屋焼について

壺屋焼は琉球国朝尚貞王時代の 1682 年，当時の陶業地であった知花，湧田，宝口などを現在の那覇市壺屋町に移設統合したのが始まりと言われている。

大正時代には民芸運動の先駆者，柳宗悦をはじめ，浜田庄司・河井寛次郎・バーナード・リーチなどが幾度となく沖縄の壺屋を訪れ製作している。伝統を守りながら生産される陶器は高い評価を受けて，一躍壺屋焼は日本全国に知られるようになった。

戦後には戦争で破壊されたすべての物の中から生活に必要な日用雑器を作る為に陶工達が一早く召集されて，壺屋は復興していった。

1970 年以降壺屋の登り窯は窯から出る煙の公害問題で郊外に移る事を余儀なくされて金城次郎氏をはじめ登り窯を使用する人は読谷村などなどに移って行った。現在壺屋ではガス窯や電気窯などで生産を続けている窯元がいくつもあり，やちむん通りでは観光客や地元の客などでにぎわっている。



壺屋焼は荒焼と上焼と大きく二つに分けられる。荒焼とは 1120 くらいの温度で焼成した無釉焼締めの炆器質の焼物の事を言う。主に水甕や酒甕・味噌甕などの大物を中心に徳利などの小物類もある。窯は半地下式の穴窯で昇炎式の単室傾斜窯で還元焼成になりやすい。



上焼は 1230 くらいの温度で焼成する。絵付などの加飾を施して，釉薬をかけた陶器の焼物である。窯は登り窯やガス窯・灯油窯・電気窯などで焼成する。(主に酸化焼成) 今回の研修ではこの上焼をやらせてもらった。



現在沖縄では壺屋や読谷だけにとどまらず、県内幅広く点在しており、100軒を超える窯元が生産を続けている。

(2) 読谷壺屋焼「常秀工房」島袋常秀氏との出会い

9月16日に福岡空港から那覇空港に到着。沖縄は初めてだったので、日差しの強さとその暑さにまず驚いた。その足でモノレールとバスを乗り継ぎ読谷村へと向かった。喜名というバス停で降りると島袋常秀氏自ら車で迎えに来てくれた。以前電話でしか話した事がなく、初対面だったので少々緊張ぎみだったのだが、気さくに声を掛けてもらって、工房の方々も紹介してもらって安心する事ができた。その日の夜常秀氏と夕食を共にしながらこれからの研修内容等を打ち合わせさせてもらった。

島袋常秀氏はもともと壺屋の御出身で、父親の常恵氏のもとで修行を積んで独立をする。その後読谷に工房を移して金城次郎窯を共同窯として使用している。また、沖展や国画会などで数々の賞を受賞しており、現在は沖縄県立芸術大学美術工芸科の教授もされている。

翌日には、やちむんの里を案内してもらった。やちむんの里には3つの共同登り窯があって、金城次郎窯、読谷山窯、読谷山北窯がそれぞれ共同で運営している。



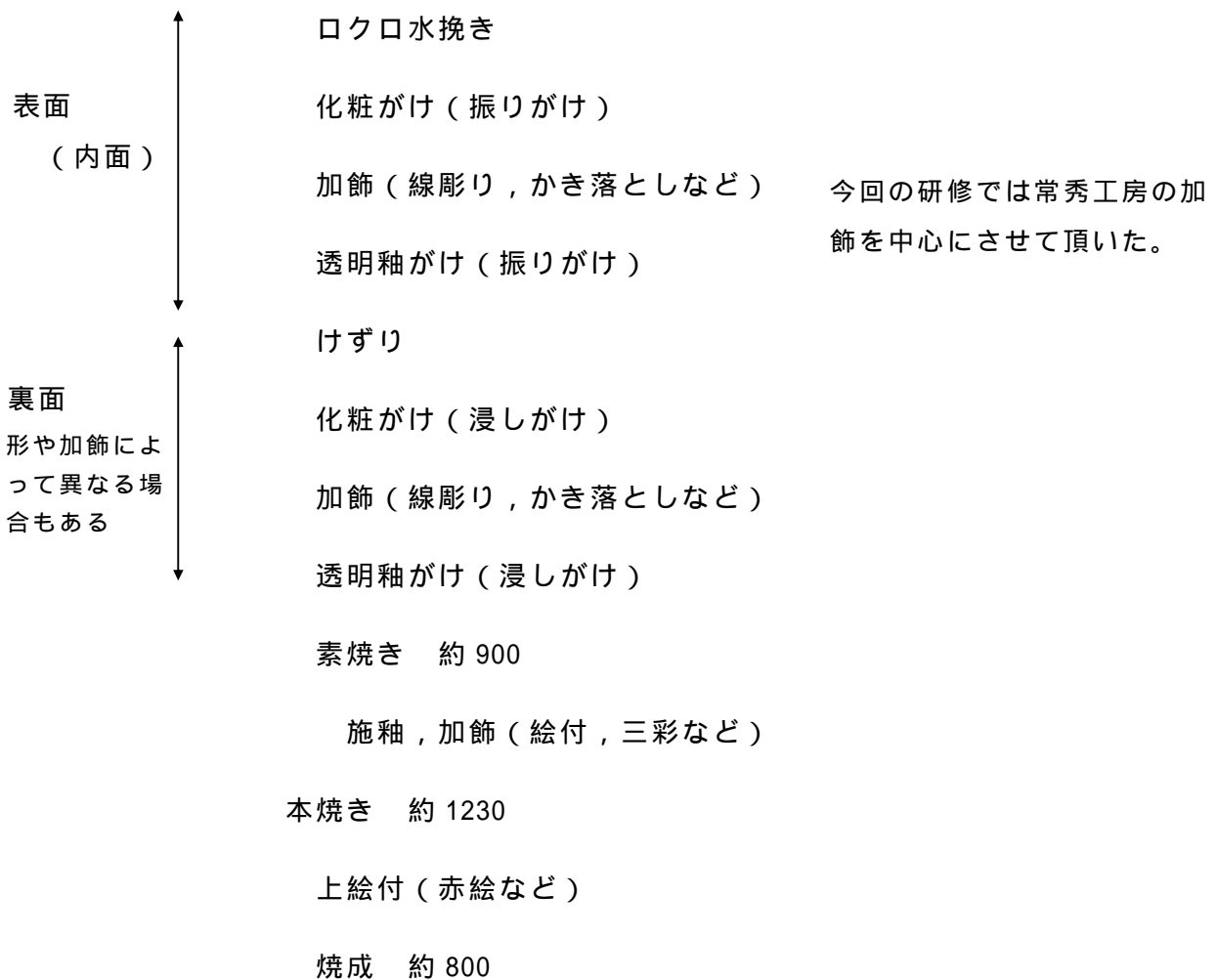
研修中3ヶ月内にも登り窯を焚く事になるので金城次郎共同窯の方々にも紹介して頂いて挨拶させてもらった。(故・金城次郎氏は1985年に沖縄県で最初の国の重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されており沖縄を代表する陶工の一人だった。)現在は次郎氏の長男敏男氏(敏男工房),次男の敏昭氏(敏昭工房),長女の宮城須美子氏(宮陶房)と金城敏幸氏(陶芸城)と島袋常秀氏(常秀工房)の5軒共同で登り窯を運営している。

(3) 成形から焼成までの製造工程

今回の研修では当初加飾をテーマにするつもりでいたのだが、成形をしないと加飾も出来ないのので、成形から焼成まで全体を通して研修させて頂く事にした。

また、沖縄独自の焼物もあるので、そういう物も作って見たら?と言うアドバイスも受けて「沖縄の陶器」を研修する形になった。

形や加飾の方法によって多少異なる事はあるが、大まかな工程は以下の通りである。



ロクロ水挽き（土について）

まずは土に慣れようと思い、湯呑みから作ってみた。沖縄の土は単味で使える土が少ないため、何種類かの土をまぜて使用している。

上焼 {
・名嘉粘土（ナカマ） ねばり，コシ（有）
・為又粘土（ピーマタ） ねばり（有）
・前兼久粘土（メガニク） 耐火度（高）

荒焼 {
・ジャーガル 耐火度（低）
・マージ 耐火度（高），コシ（有）

- ・沖縄の原料は賦存地の地名で呼んでいる。
- ・小石原の土よりもコシがなくて伸ばすのに苦労した。慣れるまでしばらくは違和感があった。

化粧がけ（振りがけ）

椀，皿などの内化粧を施すときの技法で，手に持った器物に適量の化粧土を入れ，手前にかたむけて1回転させ，余分な化粧土をこぼしながら器物内面にまんべんなく付着するようにする。釉がけも同じ方法で透明釉をかける。素地が乾燥していないと水分を含みすぎて素地が壊れる。また乾燥しすぎると化粧土が剥離するのでタイミングが難しい。



加飾

仕上がった素地や化粧掛けされた半乾燥の器物の内・外面に鉄筆やカンナなどの道具で装飾を加える。線彫り，搔落，くし目，飛しガンナ，イッチン，鑄などがあり，これらを組み合わせて加飾を施す場合もある。



けずり

ロクロ上にシッタ（削り台）を作っ
てけずる。ここでは土を盛ったり、フェル
トを敷いて固定したりして、その上でけ
ずっていた。内面を施釉までして仕上げ
ているので、ロクロの上に乗せてるだけ
の状態ではけずっている途中に動いたりし
てけずりづらかった。



化粧がけ 釉がけ（浸しがけ）

椀や湯呑、花瓶などの外化粧を施すときの技法で、化粧土の入った桶などに器物を縁
いっぱいまで浸す。このとき全体に均一に化粧土が付着するようによく攪拌しておく。

浸した時に内側に溢れないように注意し
て高台畳付は拭い去っておく。

高台内まで化粧を施すこの技法は沖縄の
陶芸の大きな特徴と言えるだろう。



化粧土は安富祖（アフソー）と呼
ばれる思納村で採れる土を主に使っ
ている。

素焼き 約 900

昔は素焼きの工程はなかったらしく、今でも素焼きをせずに生掛けで本焼きする所と素焼きをする所と両方あるとの事で常秀工房では素焼きをしていた。また常秀氏は蠟抜きの技法も得意とされており、素焼きをするほうが効果的である。主にガス窯でやっていた。



施釉・加飾（絵付など）

素焼した器物に呉須や弁柄などで、唐草や幾何学紋様などを下絵付する。蠟抜きなどは蠟で抜いてから青釉などをズブ掛けする。皿などは裏面を黒釉で浸しがけをしていた。口縁部分は飴釉などで筆塗しておく。



本焼き 約 1,230

主に登り窯やガス窯を使っていた。ゼーゲルコーンの7と8を使用して約 1,230 で焼成する。

上絵付 焼成

赤絵などの上絵付は本焼後に絵付のりが良くなるように「にかわ」を塗る。上絵付の後に約 800 で焼成して、上絵を焼きつける。主に電気窯やガス窯を使っていた。



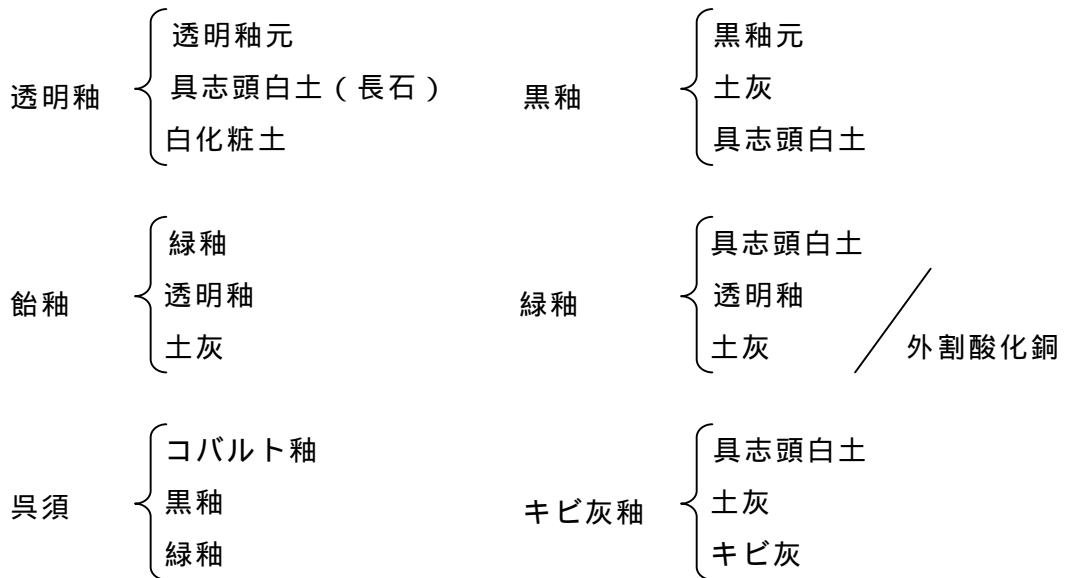
(4) 釉薬研究会にて

10月3日から那覇市の伝統工芸館で行われた「釉薬研究会」にオブザーバーとして参加させてもらった。壺屋焼後継者育成事業の一環として常秀氏が講師を務めており、少し以前に話を聞いていたので、是非参加させて下さいと特別に参加させてもらった。

沖縄の伝統的な釉薬を3種類の原料に分けて調合比を変えて行って三角座標をつくるというもので、受講生が他のオブザーバーも入れて17~18人くらいいてみんなで協力して行った。

PM6:30からだったので、5時頃工房を出て那覇まで通う生活がしばらく続いた。三角座標用のテストピースを1人400個くらい作って素焼きをして調合、施釉して本焼きをした。

今回調合を行った伝統釉は、透明釉・黒釉・飴釉・緑釉・呉須・キビ灰釉の6種類である。



テストピースを作って、みんなで調合、施釉、窯詰めなどをして大変だったが貴重な体験だった。何より沖縄の釉薬を知る上で大変勉強になった。





(5) 抱瓶と面獅子作り

沖縄らしいものとして抱瓶や面獅子なども作ってみた。抱瓶は石膏型でポディーを作って部品をくっつけていく作り方だった。小物のシーサーなどもこの押型成形で、型とはいえ手間のかかる作業である。抱瓶を成形するには、あらかじめタタラ（粘土板）を準備しておき、このタタラを用いて2枚割りの石膏型内面の寸法にあわせて押し当てる。次にタタラ合わせ面に粘土泥漿を筆塗りし、2個の石膏型を合わせ接着したのち、底部をタタラで覆いかぶせる。それから型割りして、型から器物を取り出す。器物をロク口に載せて口をロク口挽きして、最後に注口と耳を付ける。



面獅子も同じタタラで少し厚めの物を1個につき2枚準備して、1枚は台座、1枚は上に覆いかぶせて顔になる。顔の大きさをだいたい整えて、顔のバランスを考えながら、鼻・口・額・目・耳とを付けて、巻髪を目と口と顔全体に付ける。巻髪に線を入れて目と鼻に穴を開けて四つの角にも固定用の穴を開ける。

常秀氏が実演してくれて、見ながら一緒に作ったのだが、顔のバランスが分からず、悪魔みたいな物が出来てしまった。その後もいくつか作っていくとバランスもつかめて来た。今まで、こういう細工物はやった事がなかったので、すごく新鮮で刺激を受けた。



(6) 共同窯での窯焚きから窯出し

共同窯は年に4～5回焚いており、常秀工房では窯焚きのサイクルに合わせて注文品などの品物を作っている。今回研修と言う事で、大皿と花瓶をいくつか作らせてもらい、登り窯に入れてもらうことができた。前に作った抱瓶と面獅子も入っていて楽しみである。工房の人達みんな協力して、窯まで器物を運んで窯詰めをした。

共同窯は全部で6袋であり、常秀工房は1袋と半分の割り当てで、読谷に移って来た当初から変わってないそうだ。袋が変わる事もないみたいで、それぞれの工房が自分達の袋のメンテナンスもしている。

- | | | |
|------|-------------|-------------------------|
| 1 番窯 | 敏男工房・常秀工房 | 火口約 17～18 時間(焙り) |
| 2 番窯 | 敏昭工房(金城敏昭氏) | 各袋約 4～6 時間(攻め,ねらし) |
| 3 番窯 | 宮陶房(宮城須美子氏) | 4～5 日間冷ます |
| 4 番窯 | 敏男工房(金城敏男氏) | |
| 5 番窯 | 常秀工房(島袋常秀氏) | 各袋の両側に焚口があり,両方から薪を投入する。 |
| 6 番窯 | 陶芸城(金城敏幸氏) | 薪は赤松を使用。 |

1 1月5日の午前2時頃火口に火が入った。火口を焚くのも交代制で常秀工房は午前11時から午後3時までの4時間担当した。大きな火口が1つあって、そこから薪を投入するのだが、薪が大きくて丸太ごと入れたりして少し驚いた。



午後7時頃から12時まで一番窯を焚く。焚口から炎が吹き出してかなり熱かった。窯に温度計はなく、ゼーゲルコーンの7と8を使用してあとは色見と経験で判断する。次の日の午後7時半頃から午前1時頃まで5番窯を焚いた。



沖縄の窯にはアーチ形の天井側面にカキヤー（ワキグラー）と呼ばれる小さな穴（直径10～15cmくらい）があり、そこから細く短い薪を投入したりする。火が弱い部分を補うための補助穴で、沖縄の登り窯には大体この穴がある。

また焚口の下（窯内の奥角）にも穴があり、そこからも補助的な薪を投入する。（ここではなぜか「アルバイト穴」と呼ばれていた）この穴からは、オーグスヤーもと（青磁もと）と呼ばれる真鍮と石灰をまぜて団子状にしたものを攻めの最後に投入する。（オーグスヤーもとは緑釉の原料となる物で焼成後に粉碎，それから調合して使用する。）



窯焚きも終わってあとは無事に焼き上がって出て来るのを祈る気持ちである。工房にあった古い本を読んで見ると、昔から沖縄では窯出しの時、窯から出て来る事を「生まれる」と表現していて、火を入れる時や窯を交代する時などに「ウマラシミショウレ（良い作品が生まれますように）」とお互いに声を掛け合っていた。と書いてあった。良い言葉である。

4日間冷まして窯出しをした。自分の作った大皿2枚は裏面の黒釉が高台から流れて焼きついてしまっていた。釉が濃く掛かってしまったのが原因だろう。高台からヒビが

入り，2枚とも割れてしまった。残りの花瓶や面獅子などの焼き上がりは良好で全体の焼き上がりも良かっただけに大皿は残念だった。



共同窯を体験させてもらって，こういうシステムはお互い協力しながらできる良いシステムだと感じた。

(7) 壺屋まつりにて

11月17日から20日までの4日間，那覇市与儀公園で「壺屋まつり」というイベントが開催された。常秀工房も参加していてタイミング良く体験する事ができた。



壺屋まつりは毎年ほぼ同時期に行われており、公園内のテントと壺屋やちむん通り周辺は陶器市などで賑わい、数々の催し物で、来場者を楽しませていた。



催し物の1つに「カーミスーブ（甕勝負）」と呼ばれる物があって、せっかく沖縄に来てるのだからと言われて出場する事になってしまった。「カーミスーブ」とは、陶工達が与えられたテーマの作品をいかに早く美しく仕上げていくかを紅白に分かれてリレー式で競い合うという物で、古くは戦前から行われているらしい。

普段の仕事とは違って周りの人達に見られながらロクロをやるので、緊張で少し手が震えた。珍しい体験をする事ができて、とても思い出に残る「壺屋まつり」だった。



(8) 食器作り(ガス窯焼成)

研修残り1ヶ月となった所で再度食器を中心に作ってみた。食器類は最初の頃少し作っただけで、なれない加飾や絵付の濃度などがうまくいっておらずに悔しい思いをしていた。今度は前回の失敗をふまえながら慎重にやる事にした。加飾に少しでも慣れようと思い、形の種類と数のある程度作った。それを蠟抜きや染付けなどの装飾別に分けて、なるべく数をこなせるように加飾を行う様にした。



研修中に送ってもらっていた小石原の土を使って、沖縄の化粧土と釉薬が合うかどうか実験的な事もやってみた。土の収縮率もほぼ同じで、化粧土も釉も合っていた。焼き上がりも沖縄の土と特に変化は見られなかった。

ある程度の数がたまってきたので、工房のガス窯で1窯分焼成させてもらった。窯はクセなどがあるため常秀氏に見てもらいながらの焼成だった。



赤絵（上絵）もいくつかやってみた。施釉して本焼きした後に絵付を行うので、表面がなめらかで素焼地に筆書きをする下絵付よりも書きやすかった。しかし下絵付と同様に筆の運びが慣れていないので絵付には大変苦労した。



(9) 石垣島視察研修

八重山諸島の石垣島では八重山博物館と南嶋民族資料館を視察して、島で創作を続けている作家の工房を何件か訪問した。

八重山博物館と南嶋民族資料館での視察

八重山諸島で昔使われていた古い民具や染織り、陶磁器などが展示されていて、中には八重山焼やパナリ焼なども資料と共に展示されていた。



八重山焼は 1724 年に琉球王府の命を受けた陶工、仲村渠到元（なかんだかりちげん）により製法が指導され生産が始まった。当時石垣島で焼かれた焼物を総称して「八重山焼」と呼んでいる。八重山焼は戦後しばらくの間まで焼かれていたが、以降は途絶えてしまった。また、西表島の南東に位置する新城島ではパナリ焼と呼ばれる土器が発掘されている。

石垣島の作家を訪ねて

現在石垣島で工房を開設した作家は 10 人以上いて、それぞれが自由な発想で創作している。アンパル陶房と南嶋焼を訪ねてみた。アンパル陶房は宮良ゆうなさんと宮良断さんの姉弟で作陶している。家族で農園もやっていて工房に隣接する売店では新鮮なフルーツやジュースなども販売していた。石垣島の原料にもこだわり、島で採れる陶石を使用して磁器も作っている。

眼下に広がる石垣の海がとてもきれいでうらやましいくらいの環境だった。



南島焼，奈美ロリマーさんの工房は石垣市郊外の山間にあり，ロリマーさんは一人で作陶している。南国風のカラフルな絵付は個性的でやはり石垣で採れる土を自分で製土して使用していた。土は耐火度が1160 くらいで結構低くて，釉薬も融点が低くなるように工夫しているとの話だった。



(10) 沖縄本島での視察研修

読谷・やちむんの里周辺での視察

やちむんの里近くには世界遺産にも登録されている「座喜味城跡」と，隣接している「歴史民族資料館」とがある。

歴史民族資料館では読谷の歴史民族をテーマに遺跡や農具・漁具・織物・染物・古陶器（喜名焼）などが幅広く展示してあった。また，3Fは美術館になっていて，たまたま「金城次郎展」などが開催中でどれも見ごたえがあった。



やちむんの里のすぐ近くにある茂生窯，上江洲茂生氏も訪ねてみた。上江洲氏は常秀氏とも親交があり，共に酒も飲むそうだ。登り窯での焼成にこだわって，おおらかで力強い作品や温かみのある作品は，氏の人柄を表しているようであった。また，登り窯のすぐそばに赤絵用の薪窯もあり，登り窯と一緒に見学させてもらう事ができた。



壺屋やちむん通り及びその周辺での視察

やちむん通りの石畳を歩くと、陶芸店やギャラリーなどが軒をつらねていて、店頭には所狭しと焼物が並んでいる。シーサーや厨子甕などが並んでいるのはいかにも沖縄らしい。また、今は使われていないが、東又窯と南又窯と呼ばれる大きな登り窯が残っていてかつての壺屋の面影を垣間見ることができる。



やちむん通りの一角にある「壺屋焼物博物館」を見学した。沖縄の焼物が時代を追ってわかりやすく展示してあったり、映像シアターで壺屋焼の歴史を見たりできる。抜法や行程などの紹介と一緒に道具なども展示してあった。沖縄の陶器を知る上ですごく勉強になった。



周辺の窯元を何軒か訪ねてみた。新垣陶苑の新垣修氏は、工房はうるま市の方にあるのだが、そちらの方も見学させてもらった。うるま市の工房では登り窯もやっけていて公募展で数々の賞を受賞している。

修氏が考案したという「きび文様」などが印象的で、沖縄らしい焼物を心がけながら作陶しているとの話であった。人柄も良く、「何でも聞いていいよ」と工房内を案内してもらった。



育陶園，高江洲忠氏の工房は、やちむん通りから少し入った所にあり、通り沿いには売店と隣にシーサー専門の工房もある。さらに「陶芸道場」と言う工房も新設して、そ

こでは、陶芸体験もできるようになっている。新設したばかりの工房は雰囲気もよくて都会の中とは思えないくらい環境も良さそうな所だった。ちょうど蹴ロクロでカラカラの製作中で、ロクロを挽きながら、これからの展開や夢などを語る忠氏は熱く魅力のある方であった。



沖縄県立博物館，首里城公園を見学

県立博物館は、首里城公園のすぐ近くにあります。歴史・民俗・美術工芸などの展示室に分かれています。歴史や文化、自然など幅広く沖縄を知る事ができて、古陶磁などを見て参考にもなりました。



せっかくなので、首里城公園にも足を運んでみた。首里城正殿は、沖縄戦を含めて過去4回の焼失、再建を繰り返しており、現在の正殿は1712年に再建され戦前まで残っていた建物をモデルにしている。絢爛豪華なその木造建築物は当時の琉球王朝の繁栄を

物語っていた。また、公園内には世界遺産登録の園比屋武御獄石門（そのひゃんうたきいしもん）と玉陵（たまうどうん）とがあり、多くの観光客で賑わっていた。



4．研修を終えて

長いようで短い3ヶ月が終わった。ようやく工房の雰囲気や全体の流れに少し慣れ始めた頃だったので、少し寂しいような心残りのあるような気がする。正直なところ最初は口クロができればなんとかなるだろうと甘い考えを抱いていたのだが、土は挽きにくいし、加飾のやり方が全然違うのでかなり手間取ってしまった。研修期間中はタイミングも良くて、共同窯で窯焚きをしたり、壺屋の釉薬研究会に参加させてもらったりして、とても勉強になった。

たった3ヶ月で沖縄の加飾技法をマスターできる訳はないのだが、色々な事をやらせてもらって、これからの作陶において役立つ技術的な幅が出来たと思う。自分自身満足のいく研修内容だった。視察研修では数々の博物館や資料館等を見学する事ができたし、色々な工房の作家との意見交換もできた。沖縄での出会いはどれも心に残るものがあったし、人柄も良い人ばかりで、すごく良い刺激を受けた。またお会いしたいものである。沖縄の伝統文化は焼物に限らず、沖縄らしい物が数多く存在する。「沖縄らしい」と言うのは、気候や空と海の青さ（自然）、歴史などから生まれてくる事だと研修を通して感じる事ができた。かつての琉球王国を経て、様々な歴史を乗り越えてきた沖縄では今も脈々と伝統文化は受け継がれている。

今回の研修を踏まえながら、今後小石原で自分なりにどう消化して、どう生かして物作りをしていくかと言うのが課題だと感じている。そして今回突然の研修申込に拘らず、快く受け入れて下さった島袋常秀先生。工房内では、自由に研修させてもらい、工房と大学を行き来する忙しい中でも何一つ隠す事なく色々な事を教わった。一緒に酒が飲めた事も良い思い出である。また、工場長の奥平さんを始め、常秀工房の方々にも色々教えてもらって助けてもらった。今回研修中に関わってくれた人達への感謝の気持ちは筆舌に尽くし難い。

最後に、研修にあたってご推薦頂いた小石原焼協同組合関係者の皆様、快く送り出してくださったマルワ窯窯元、そして、このような機会を与えて頂いた九州電力株式会社関係者の皆様に、心より感謝しお礼を申し上げます。

平成 17 年 12 月

鶴 岡 誠